



# 渡波事典

写真と地図で見る歴史



## 石巻地方歴史年表

367(仁徳55)年 ― 上毛野田道将軍が伊寺水門で戦死  
753(天平勝宝5)年 ― 陸奥国牡鹿郡の人丸子豊島ら24人は牡鹿連の姓を賜る  
774(宝龜5)年 ― 蝦夷が桃生城を侵略  
797(延暦16)年 ― 坂上田村麻呂が征夷大將軍に任ぜられる  
859(貞観元)年 ― 鹿島御児神社の初見  
927(延長5)年 ― 牡鹿10座、零羊崎神社・拜幣志神社・曾波神社・鳥屋神社・鹿島御児神社・飯石大島神社が記載される  
1339(延元4)年 ― 後醍醐天皇崩御・湊に吉野先帝菩提碑建立  
1340(暦応3)年頃 ― 伊勢平氏の5家が根岸村に土着  
1363(正平18)年 ― 牧山に両峰山梅溪寺開山  
1532~44(天文年間) ― 佐々木肥後が渡波本町に屋敷を置く・鎮守浜大明神を祀る・根岸熊野神社が建替られる  
1563(永祿6)年 ― 葛西兄弟が牧山で戦い梅溪寺焼失  
1573~91(天正年間) ― 室町幕府滅亡。梅溪寺6世通宗中和和尚が須浜洞源院を開く  
16世紀末頃 ― 曼明神社ができる・2代目肥後が歌川に肥後橋を架ける  
1589(天正17)年 ― 「石巻」の初見(葛西氏黒印状)  
伊達政宗が黒川城入城  
1590(天正18)年 ― 伊達政宗が小田原参陣・葛西氏大崎氏滅亡、旧葛西家臣笹町但馬2貫文を拝領  
1594(文祿3)年 ― 伊達政宗が朝鮮渡海し帰国、御召船頭を勤めた阿部十郎兵衛土佐が政宗より拝領した軍配团扇を日和山の愛宕神社に奉納  
1597(慶長2)年 ― 木曳堀開削、川村孫兵衛が仙台に入る？  
1599(慶長4)年 ― 牡鹿郡に大綱(定置網)の初見  
1600(慶長5)年 ― 関ヶ原合戦・伊達軍が会津攻めで白石城攻撃・葛西大崎船止日記に「いしの満き」と「湊」に各15艘の船あり  
1604(慶長9)年 ― 伊達政宗石巻巡視、桃浦御飯屋、五大堂完成、白石宗直が登米移住  
1613(慶長18)年 ― 慶長遣欧使節がサンファン号で月浦出帆  
1614(慶長19)年 ― 伊達政宗の子・伊達秀宗が宇和島藩10万石を与えられる  
1615(元和元)年 ― 大坂夏の役に豊臣家滅亡・門脇に紫雲山西光寺が開山、梅溪寺十世食州金越和尚が長流寺を開山  
1619(元和5)年 ― 佐々木次郎兵衛・内海甚左衛門が開基となり梅溪寺十世食州金越和尚が法巡山宮殿寺を開山  
1616(元和2)年 ― 川村孫兵衛が迫川・江合川・北上川の三川合流工事に着手  
1620(元和6)年 ― 支倉常長が帰国、江戸廻米の始まり  
1621(元和7)年 ― 石巻地方で金山発見  
1622(元和8)年 ― 仙台藩が石巻村に御蔵建設、米谷喜右衛門を積立役人に登用、縄張大明神勧進  
1623(元和9)年 ― 川村孫兵衛重吉が北上川改修工事に着手~1626年  
1625(寛永2)年 ― 流留村の菊地與惣右衛門が塩田開発に着手  
1626(寛永3)年 ― 石巻港開港、仙台藩が諸国入込御免(移住政策)を発令  
1631(寛永8)年 ― 牡鹿郡「へびた」と「かどのわき」の初見(伊達氏黒印状)  
1637(寛永14)年 ― 中村庄右衛門が仙台藩御座船棟梁兼船横目棟梁を拜命  
1638(寛永15)年 ― 菊地與惣右衛門が塩田45町歩を拓き釜屋39を建設  
1642(寛永19)年 ― 18人が端郷渡波で検地をうけて御百姓となる・渡波本町が宿場取立・石巻村に菩提山永嚴寺を開山  
1646(正保3)年 ― 万石浦に松前釜築造  
1646(正保3)年 ― 笹町氏が湊村牧山に長禪寺を開山

1649(慶安2)年 ― 伊達忠宗が万石浦と命名  
1658(万治元)年 ― 湊村に長嘯山慈恩院が開山  
1659(万治2)年 ― 佐須濱須田家先祖が尾崎神社を勧請・門脇村に念行山称法寺が開山  
1663(寛文3)年 ― 蛇田村の愛宕山東雲寺が現在地に移転  
1666(寛文6)年 ― 蛇田村蛇田町(現旭町)が開町  
1673~80(延宝)年間 ― 赤井三右エ門が長浜に黒松植栽  
1677(延宝5)年 ― 門脇村釜の仙台藩士らが浜須賀波除土手大道に松植樹  
1680(延宝8)年 ― 渡波裏町が宿場取立  
1689(元禄2)年 ― 松尾芭蕉と河合曾良が石巻村に一宿  
1690(元禄3)年 ― 遠山帯刀が湊村に2千石拝領  
1697(元禄10)年 ― 取揚坂に流留村の念仏講が念仏供養碑建立  
1698(元禄11)年 ― 大心全了が渡波に秋葉山大権現を勧請、「牡鹿郡萬御改書上」作成される  
1704(宝永元)年 ― 深村正右衛門らにより秋葉神社が創建  
1705(宝永2)年 ― 御百姓らが長浜に黒松植樹  
1707(宝永4)年 ― 渡波と流留村の境争いに裁定くんだり境界決まる  
1713(正徳3)年 ― 渡波南町が宿場取立  
1719(享保4)年 ― 無量寿庵念仏堂が建立  
1727(享保12)年 ― 石巻村に仙台藩鑄銭場建設、翌年から寛永通宝を鑄造開始  
1732(享保17)年 ― 宮殿寺内に一念弥陀仏群滅無量罪の碑建立  
1735(享保20)年 ― 鹿島御児神社が現在地に遷座  
1739(元文4)年 ― 流留塞ノ神に正念庚申供養塔建立  
1740(元文5)年 ― 祝田浜念仏女人講中が双子地藏を建立  
1743(寛保3)年 ― 宮殿寺墓地内に奉正念庚申供養塔建立  
1745(延享2)年 ― 流留塞ノ神に南無月光面佛碑建立、塩場が流留組と渡波組に分離、渡波の火災が飛火流留妙法庵の延命地藏が作佛  
1752(宝暦2)年 ― 宮殿寺内に虫供養塔・庚申塔建立、蛇田町から出火307軒の大火  
1753(宝暦3)年 ― 渡波御塩蔵から出火4万余俵を焼失  
1755(宝暦5)年 ― 宝暦の飢饉発生、~13年まで続く  
1756(宝暦6)年 ― 浜大明神の小祠を勧請  
1760(宝暦10)年 ― 津田清左衛門が浜大明神を勧請  
1765頃(宝暦~明和)年間 ― 渡波に魚の四分間屋開設が許可  
1764~71(明和)年間 ― 渡波新町・新田町が宿場取立  
1769(明和6)年 ― 宮殿寺に南無阿弥陀仏碑建立  
1770(明和7)年 ― 風土記御用書出を記す  
1773(安永2)年 ― 佐須濱入口に青面金剛像建立  
1775(安永4)年 ― 澤田村境畑に飯綱権現碑建立  
1779(安永9)年 ― 天明の飢饉、56万石の減収  
1783(天明3)年 ― 宮殿寺に三界萬靈塔建立  
1784(天明4)年 ― 渡波大火  
1787(天明7)年 ― 渡波火消三十人組組織  
1790(寛政2)年 ― 渡波火消三十人組が大心全了上座の碑建立、石巻村米沢屋の若宮丸がアリュージョン列島に漂着  
1791(寛政3)年 ― 鹿妻立石に馬頭観世音碑建立  
1793(寛政5)年 ― 千刈田草分神社に青面金剛碑建立  
1799(寛政11)年 ― 佐須濱に飯綱権現(秋葉三尺坊祭神)碑建立、若宮丸乗組員4人が世界一周で帰国  
1804(文化元)年 ― 千刈田草分神社に湯殿山碑建立  
1806(文化3)年 ― 祝田浜塩田釜主五人が船場に永代燈建立  
1813(文化10)年 ― 石巻村に立町が開町  
1818(文化15)年 ― 大宮町に青面金剛碑建立  
1819(文政2)年 ― 秋葉神社に山神碑建立  
1822(文政5)年 ― 秋葉神社に金毘羅碑建立  
1823(文政6)年 ― 原山崎に青面金剛碑建立・宮殿寺に地藏碑建立  
1825(文政8)年 ― 旧魚市場に渡切不動明王碑建立  
1829(文政12)年 ― 天保の飢饉、~天保14年まで続く  
1834(天保5)年 ― 宮殿寺墓地北に千人溜が掘られる  
1836(天保7)年

1840(天保11)年 ― 千人溜に内蔵前亡後滅三界萬靈塔建立  
1842(天保13)年 ― 葦塚に六十六部碑建立  
1843(天保14)年頃 ― 祝田浜五十鈴神社祭礼で流籠馬はじまる  
1845(弘化2)年 ― 下野国井上吉兵衛が伊原津に金華山道標建立  
1847(弘化4)年 ― 渡波最後の検断佐々木新五平と流留村肝入松川忠作が潮塚碑建立  
1849(嘉永2)年 ― 内海源吉が五性橋開の汐入地を開田  
1850(嘉永3)年 ― 三五郎が磔の刑となる  
1852(嘉永5)年 ― 神主佐藤筑後藤原弘秀が浜大明神縁起を記す、吉田松陰が石巻村を訪問  
1857(安政4)年 ― 久米幸太郎が祝田浜で父の仇の滝沢休右衛門を討つ  
1859(安政6)年 ― 花立山の一角に滝沢休右衛門の供養碑・潮塚建立  
1868(慶応4)年 ― 戊辰戦争で奥羽越列藩同盟の仙台藩などが降伏、榎本武揚らが石巻・渡波に寄留し物資調達、折浜から出港  
1869(明治2)年 ― 桃生県から石巻県と改称  
1872(明治5)年 ― 桃生牡鹿本吉栗原登米遠田志田仙台県を合わせて宮城県となる  
1873(明治6)年 ― 第七大学区第二中学区第九小学校根岸小学校が開校・教員3名生徒数151名(男112女39)、根岸本郷に文教場開設  
1874(明治7)年 ― 浜大明神が村社となり伊去渡夜和氣命神社と改称  
1875(明治8)年 ― 根岸村戸数537戸(流留村54戸、佐須濱16戸、祝田浜26戸)、根岸字本町で郵便受取所の事務はじまる、第七大区牡鹿郡渡波屯所(後の駐在所)が設置  
1876(明治9)年 ― 祝田浜大火、大久保利通内務卿が石巻視察、金華山燈台点燈、現在の宮城県の行政区が確定  
1878(明治11)年 ― 野蒜築港工事に着手  
1881(明治14)年 ― 石巻港に救難団体援護社が創設  
北上運河開削・有栖川宮が石巻視察  
1882(明治15)年 ― 北上川に東・西内海橋が架橋  
野蒜内港が鳴瀬川河口に完成  
1883(明治16)年 ― 渡波大火、肴町出火し全焼  
1884(明治17)年 ― 根岸・流留・祝田・佐須の連合村戸長制が発足、野蒜内港突堤が台風で崩壊し計画挫折  
1885(明治18)年 ― 渡波にコレラ患者10名発生、日本郵船会社石巻支店を開設  
1887(明治20)年 ― 本町大火で市街の南半分を焼失、東北本線  
上野~仙台間開通、野蒜測候所が移転  
1888(明治21)年 ― 一府九県水産共進会が石巻村中瀬で開催  
1889(明治22)年 ― 石巻村・湊村・門脇村の3村で石巻町制施行  
渡波町制施行、根岸村・祝田浜・佐須浜で発足(山屋薫町長・3959人)  
1897(明治30)年 ― 伝染病隔離病舎を長浜囲いに建設  
牡鹿郡立簡易水産学校が湊町で開校  
1902(明治35)年 ― 牡鹿郡立模範製糸工場一誠館が湊に開設  
1905(明治38)年 ― 塩が専売制施行、本町に仙台地方専売局渡波官吏派出所開設  
1906(明治39)年 ― 牡鹿郡立水産学校が渡波町に新築移転・一部校舎に水産試験場業務  
1907(明治40)年 ― 石巻町に電話が設置される  
1908(明治41)年 ― 七十七銀行渡波派出所開業  
1910~16(明治42)年 ― 渡波茶話会活動はじまる  
1912(大正元)年 ― 仙北軽便鉄道が小牛田~石巻間に開通  
1914(大正3)年 ― 金華山道路改修し風越峠まで完成  
1915(大正4)年 ― 牡鹿軌道(馬車鉄道)が湊本町と渡波町明神社裏に開通、日和山・住吉公園が開園

1916(大正5)年 ― 川開きまつり始まる  
湊小学校が鉄筋コンクリート校舎として完成  
1917(大正6)年 ― 秋葉神社社殿再建  
1923(大正12)年 ― 県立石巻中学校(現石巻高)が門脇に開校  
1926(大正15)年 ― 金華山軌道(株)が石巻町湊から女川町間に開通  
1928(昭和3)年 ― 宮城電鉄(現仙石線)が小野~石巻間開通で全線開通  
1929(昭和4)年 ― (株)石巻魚市場が湊地区に開設  
1929(昭和4)年 ― 魚問屋が合併し(株)坂魚市場を設立  
1932(昭和7)年 ― 万石橋が鉄筋コンクリート造で完成  
1935(昭和10)年 ― (株)石巻魚市場が門脇に第2魚市場を開設、門脇に南地歓楽街開設  
1937(昭和12)年 ― 中国大陸で日中戦争が始まる、宮城県漁業無線通信所が門脇に開局  
1939(昭和14)年 ― 渡波水道が3月に給水開始、石巻線の石巻~女川間開通で金華山軌道(株)を廃止  
1940(昭和15)年 ― 東北振興パルプ石巻工場が操業開始  
1945(昭和20)年 ― 連合軍機が矢本・石巻・女川を空襲  
1947(昭和22)年 ― 教育改革で6・3・3・4制となる  
渡波町立渡波中学校開校  
1950(昭和25)年 ― 宮城県水産試験場が長浜町移転  
1952(昭和27)年 ― 牡鹿新聞社が中心となり渡波音頭をつくる  
1952~53(昭和27~28)年 ― 渡波魚市場棧橋が完成  
1953(昭和28)年 ― 石巻臨港線が門脇魚市場まで開通  
1954(昭和29)年 ― 石巻市立湊第二小学校新築開校  
1958(昭和33)年 ― 渡波塩田廃止が決定  
1959(昭和34)年5月1日 ― 渡波町が石巻市と合併  
1960(昭和35)年 ― チリ地震津波  
1961(昭和36)年 ― 石巻バイパス着工と石巻工業港起工式  
1963(昭和38)年 ― 県石巻工業高・市立女子商業高が開校  
1966(昭和41)年 ― 石巻市旧北上川右岸で新住居表示を施行  
石巻工業港が門脇釜地区に開港・第一船越後丸入港、石巻大区に石巻市民会館が開館  
1967(昭和42)年 ― 開北橋架け替え、東西内海橋に歩道設置  
1969(昭和44)年 ― 蛇田ニュータウンが完成、有料牧山トンネルが開通  
1973(昭和48)年 ― 石巻新漁港が長浜海岸に開港  
1974(昭和49)年 ― 宮城県沖地震発生  
1978(昭和53)年 ― 有料橋日和大橋が開通  
1979(昭和54)年 ― 渡波獅子風流が石巻市指定文化財となる  
1981(昭和56)年 ― 石巻文化センターが南浜町に開館  
1986(昭和61)年 ― 石巻専修大学が石巻市南境に開学  
1989(平成元)年 ― JR石巻線と仙石線石巻駅舎が平面統合  
1990(平成2)年 ― 万石橋を架けかえる  
1992(平成4)年 ― サンファンパークが石巻市渡波に開業  
1996(平成8)年 ― 石巻市立病院が南浜町に開院、三陸道石巻河南IC開通  
1998(平成10)年 ― 石巻市と周辺6町が合併  
2005(平成17)年 ― 石巻赤十字病院が湊から蛇田地区に新築移転  
2006(平成18)年 ― 新成1~5丁目が開町  
2011(平成23)年 ― 東北地方太平洋沖地震津波発生  
2011(平成23)年 ― 新渡波地区・新渡波西地区被災市街地復興土地区画整理事業決定  
2012(平成24)年 ― 市立女子商業高が開校式、市女高と統合し市立桜坂高校に  
2015(平成27)年 ― 市立渡波中学校がさくら町に新築移転、東消防署運営開始  
2016(平成28)年 ― さくら町1~5丁目が開町  
2017(平成29)年



石巻市案内図(昭和55・石巻市発行) 地図使用承認©昭文社第 61G029号

## 渡波の概要

明治22年、根岸村・祝田浜・佐須浜が合併し渡波町となる。万石浦西岸に砂丘上に立地する。もともと渡波という地名は、江戸期の根岸村渡波という根岸村端郷の宿場町の地名であった。古くから万石浦の入り口に立地した港町で、海上取締の番所が置かれた。金華山道の宿場町や塩田としても栄えた。北は沢田村・西は湊村鹿妻に接する。昭和34年、石巻市と合併編入。

## 地名の由来

### ① 牡鹿(おしか) 郡

古来、この地に牡鹿と牝鹿が陸まじく生息していたが、ある日その牝鹿を失った牡鹿がさも悲しむように泣き続け、ここに倒れて死んでしまった。これを見た里人等がそれを哀れみ、そこに松を植え、その下に屍を埋めたという。この松を「牡鹿の松」といい、そこにある石を「鹿石」と呼び、この地名の由来となった。現在の石巻市湊鹿妻にある洞窟がこの地であるという説もある。

### ② 石巻(いしのまき)

その昔、現在の北上川となる一迫・二迫・三迫川を総じて伊寺川と呼び、その河口としてこの地を伊寺水門(いじのみなど)、または牡鹿湊と呼んだ。さらにその河口付近に広がる草地、荒地を牧と言ひ、伊寺の牧となり、そこから転訛して石巻となったと考えられる。また、安永の「石巻村風土御用書出」には、「当村端郷住吉町住吉大明神神社地わきに、石巻石、石巻淵御座候に付き、その縁を持って村名に唱え申し候」とあり、「巻石」からと言う説もある。

### ③ 渡波(わたのは)

古く奥の海と呼ばれた万石浦の入り江で、波が折り渡していたために砂丘が生じ、それが陸地化した土地という説と、入り江を渡ることをアイヌ語で「ワツタラ」といい、それが転化したという説もある。亘理郡のワタリも同じ語源からと考えられている。

### ④ 万石浦(まんごくら)

東西約5km、南北約3 km のこの入り江は昔から「奥の海」と呼ばれ、古くから和歌に詠まれてきた。「奥の海」という歌枕はこの万石浦だという説が有力。二代仙台藩主・伊達忠宗公が牡鹿半島への鹿狩りで寄つた際「ここを干拓すれば一万石の米が収穫できるであろう」と語ったことが由来となったと言われている。

### ⑤ 祝田(いわいだ)

渡波町史によると昔は、「岩井田」と言ったようで、船出の際、岩井田は祝田に通ずるので目出度いと喜んだとある。もともと岩井田は、岩の間からわき出る水を引いて耕した田の意味で、岩間から湧き出る僅かな水で田を耕してきた地方でこの地名につながったと考えられる。

### ⑥ 佐須(さす)

さすという字は、佐須、指と書く地域が多いが、もともとは焼き畑の事でこの地方を開拓をした当初、山の草木に火を入れ、その灰をそのまま肥料として、粟・大豆・小豆・蕎麦などを蒔いて耕作した土地を指している。女川町の指浜(さすはま)、旧北上町の大指(おおざし)、小指(こざし)なども同義から来ていると考えられる。

### ⑦ 沢田(さわだ)

沢田とは字義からすると、春冬の候水の溜まっている田、沢辺にある田という意味になる。山に囲まれた水田地帯であり、的を射ていると考える。亘理郡の阿武隈川河畔にも同名の部落が存在する。

### ⑧ 流留(ながる)

『安永風土記』によると、「昔、一葉の愛らしい舟が浪のままに漂流してこの地の島に留まった。やんごとなき日女だったが、問うと「旭天女」と申し者と答え消えてしまった。護持尊があつたのを弁財天として祀り、流る留まるの縁により、地名を流留と称した」とある。さらに「この島を旭島と呼び、身柄を取り上げた坂を取上坂、塚を天女塚と呼んでいる」ともある。また、明治22年の町村合併では、隣接する根岸村と訴訟等の諸般の事情により、距離のある大瓜村他8か村との合併を宮城県知事に直訴し、稲井村の大字となった。

### ⑨ 根岸(ねぎし)

根岸村の中心で根岸本郷と呼ばれていた。由来は、「山岸に根石という石があつた」という説(「牡鹿状」と)、その昔この地域まで海があり、岸の根だったためという説もある。

### ⑩ 垂水(たれみず)

垂水山の東側に、瀑布(たき)明神が祀られています。ここには、雨が降ると岩から小さな滝が流れ落ちてきます。晴天時もじわじわしみ出した水が、一帯を湿らせています。この水が垂れ落ちる様子が垂水の由来と言われている。(木村敏郎著『渡波以呂波歌留多』)

### ⑪ 後生橋・五性橋(ごしょうばし)

渡波と流留の間には、根岸から流れる歌川(宇田川)や垂水からの小川などが流れ込み、湿地帯で歩くには大変難儀な場所であった。そこに渡波開発の祖、二代目佐々木肥後が橋を架けて肥後橋と呼ばれるようになった。“人々の難儀を救うことで後生の安楽を”の願いを込められたこの橋は、その後「後生橋」と名付けられ、地名としても残った。(木村敏郎著『渡波以呂波歌留多』)

### ⑫ 筒場(どうぼ)

渡波村と湊村の境にある筒場は、流れ出る水を根岸の堤に溜めて伊原津と鹿妻から海に流すための出口に造られた水門のようなもので、海水が逆流してくるのを防ぐ役目のもの。その筒場がそのまま地名として残った。(木村敏郎著『渡波以呂波歌留多』)

### ⑬ 栄田(さかえだ)

根岸村と湊村の伊原津・鹿妻は村境にあたる。根岸村のこの村境付近の田んぼこそが地名の由来となっている。村境の田、境田が栄田の由来と考えられる。

### ⑭ 鳥揚(とりあげ)

旭天女を海浜で取り上げた(救助)ことに由来する。取り上げが取揚、鳥揚と転訛する。

### ⑮ 念仏壇(ねんぶつだん)・榎木壇(えのきだん)・万海壇(まんかいだん)

これらの由来は、行者(法印)が壇木(黒壇)と乳木(白壇)の長短二つの薪を焚いて祈禱する壇場があつた場所で、念仏を唱えて祈禱した念仏壇、榎木が生えていた榎壇、万海坊という行者いた万海壇という地名となった。(木村敏郎著『渡波以呂波歌留多』)

### ⑯ 七勺(しちく)・三句(さんく)

菊池与惣衛門が最初に塩田開発に取りかかったのは七区画でした。現在、残る七勺は本来七勺と書き表す「勺」の口の部分を「、」で略したもの。「ななしゃく」は間違い。海水を取り込む堀がそれぞれ造られ、七勺堀は七勺前の堀で塩田が廃止された現在は埋め立てられた。(木村敏郎著『渡波以呂波歌留多』)

### ⑰ 三和町(みつわちよう)

3ヶ所の旧字地域の合併による造語町名。

### ⑱ 塩富町(しよとみちよう)

地域に富をもたらした旧塩田・製塩地に由来する地名。

### ⑲ 浜曾根(はまそね)

長浜海岸の低湿地帯(埠は曾根とも記す)に由来。

### ⑳ 入舟町(いりふねちよう)

万石浦に面した船溜・河岸に由来。

### ㉑ 伊原津(いばらつ)

津とは、港(船着場)のことで、長浜海岸の内側に気水面があり、太古の時代に奥まで海が広がっていて現在の伊原津までが海だったと考えられる。茨(いばら)が茂っていた津だったかもしれない。(木村敏郎著『渡波以呂波歌留多』)

### ㉒ 千刈田(せんがりだ)・新千刈(しんせんがり)

千回も刈り取る、すなわちとても多くの収穫がある水田だった。(木村敏郎著『渡波以呂波歌留多』)

### ㉓ 黄金浜(こがねはま)

古語で黄金は「くがね」、鉄は「くろがね」。砂鉄が多い砂浜「くろがねはま」が「こがねはま」に転化したと考えられる。(木村敏郎著『渡波以呂波歌留多』)

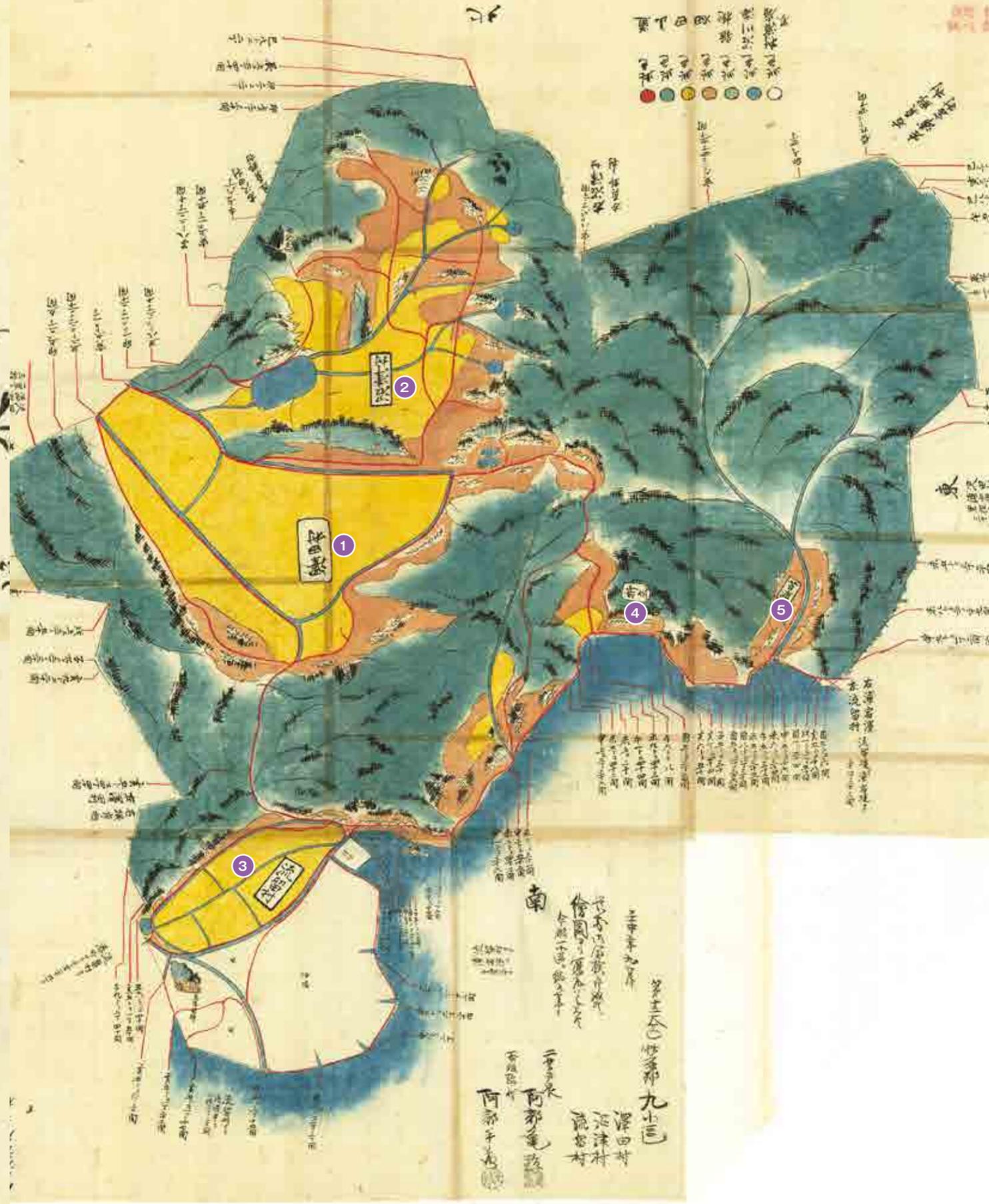
## その他の地名

### ㉔ 伊勢谷地(いせやち)

### ㉕ 七軒町(ななけんまち)

地図1 「牡鹿郡根岸村」(明治5年頃・宮城県公文書館蔵)

作年代は根岸村と渡波の表記から明治5年頃と推定。根岸村は北部に大和田地区①、「水木山」②を挟んで南部に根岸村本村の田畑と山林の農山村③。海岸と平行する複数の筋状道路(赤線)と水路。海岸部に松原と内陸部に田畑の水源とした大堤④が見える。渡波が町並みとして描かれ、当時の根岸村の概要が分かる。

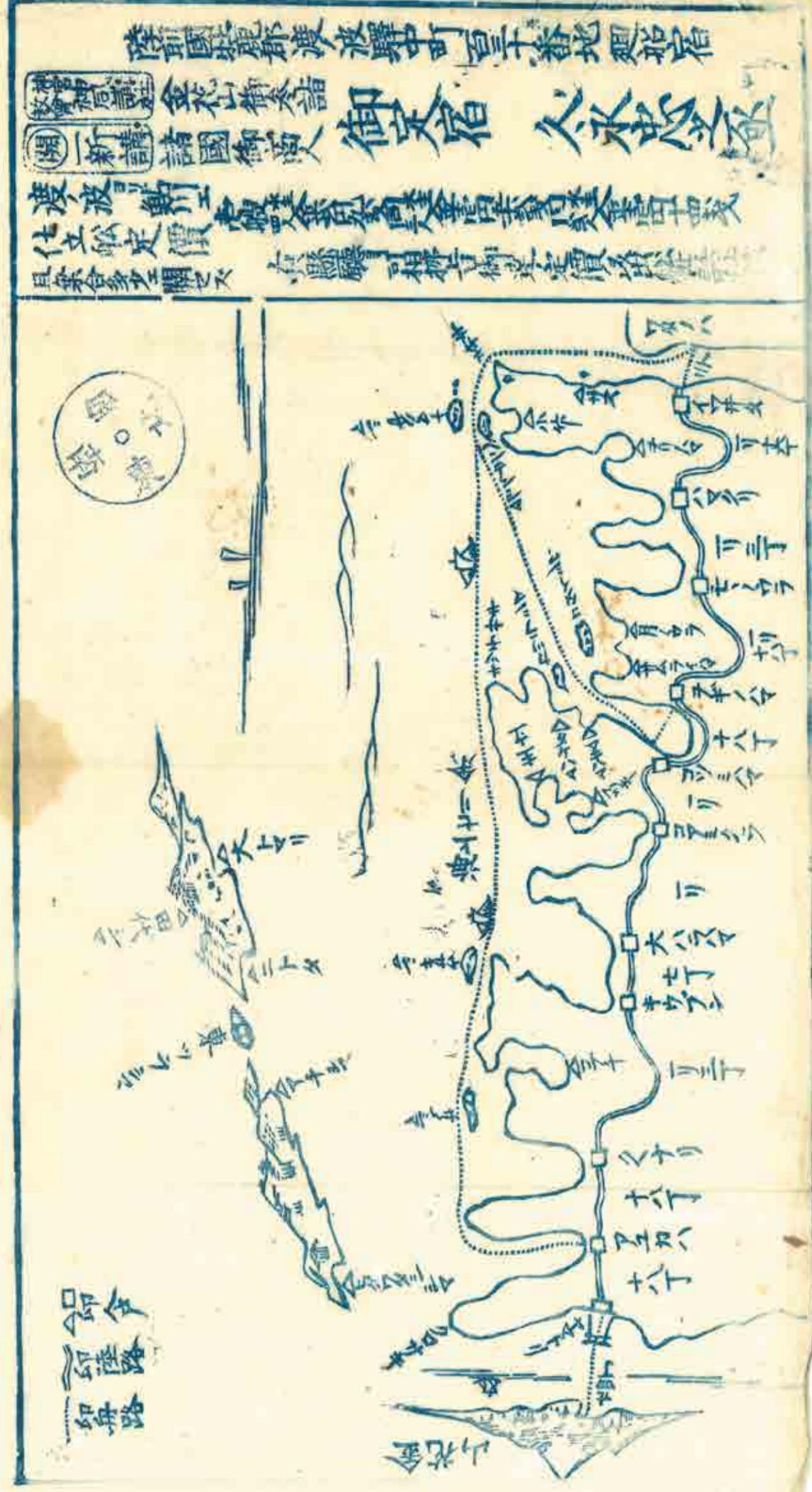


地図2 「牡鹿郡流留村・澤田村・沼津村」(明治5年頃・宮城県公文書館蔵)

地図上に「第十三大区牡鹿郡九小区」の表記から明治5年頃と推定。図は根岸村と隣接する南東部の澤田村①・沼津村②・流留村③の概要。澤田村の東端の「折立」④、「苔浦」⑤が浦宿村(後の女川村)との村境。渡波塩田の発祥地として知られる流留村は明治22年4月、沢田村・沼津村とともに新しい稲井村として8ヶ村で合併している。流留村の土地利用は稲作と塩田中心の村であることが分かる。

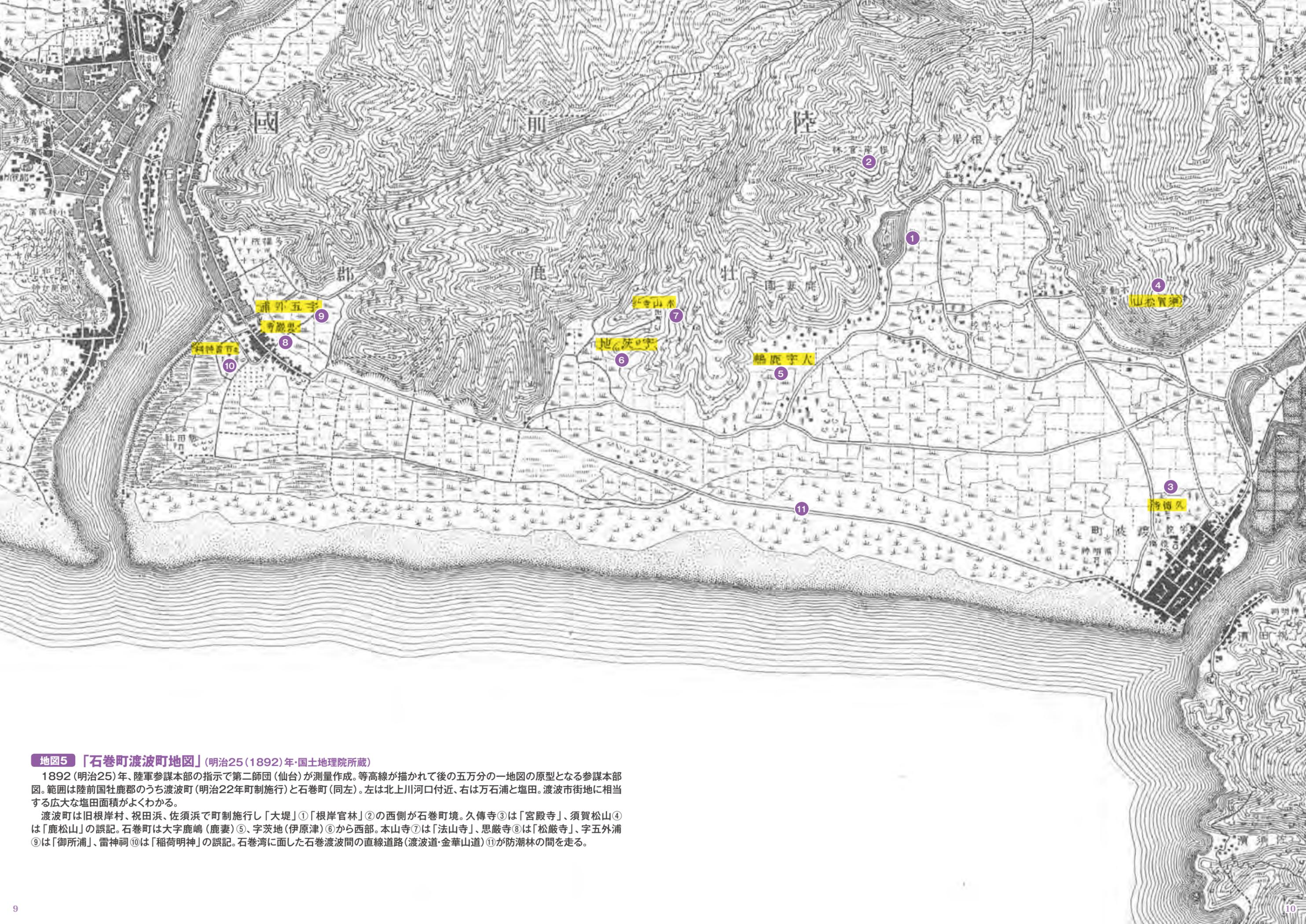


**地図3**  
**「牡鹿郡渡波全図」**(明治23年・宮城県公文書館蔵)  
 渡波町は明治22年4月、根岸村と根岸村端郷渡波、祝田浜、佐須浜が合併して発足。西部は石巻町、北東部は稲井村、南東部は荻浜村と隣接。根岸村は田畑と山林の農山村、渡波は街並みと塩田地。万石浦と海に面した祝田浜と佐須浜は漁山村。万石浦に面した紫色地域は渡波塩田。  
 金華山道は万石浦入口に橋がないため祝田渡で牡鹿半島部に渡る。陸路の場合は祝田浜東端の大浜から難所の風越峠を越えて蛤浜・桃浦に至る。



**地図4 「久永宿案内広告」**(明治10(1877)年前後・鈴木紀男氏所蔵)

江戸時代から流行した金華山詣は明治時代に入ると一層盛んとなった。案内図は江戸末期には作成されたもの。この案内図は「御宿 久永忠之丞」の店名入り。宿屋名を差し替えるだけで同様の他店図が作成できる簡便な木版刷り。地図から金華山には陸路と海路の二通りがあり、漢字と漢数字、カタカナが併用されて見やすい図である。



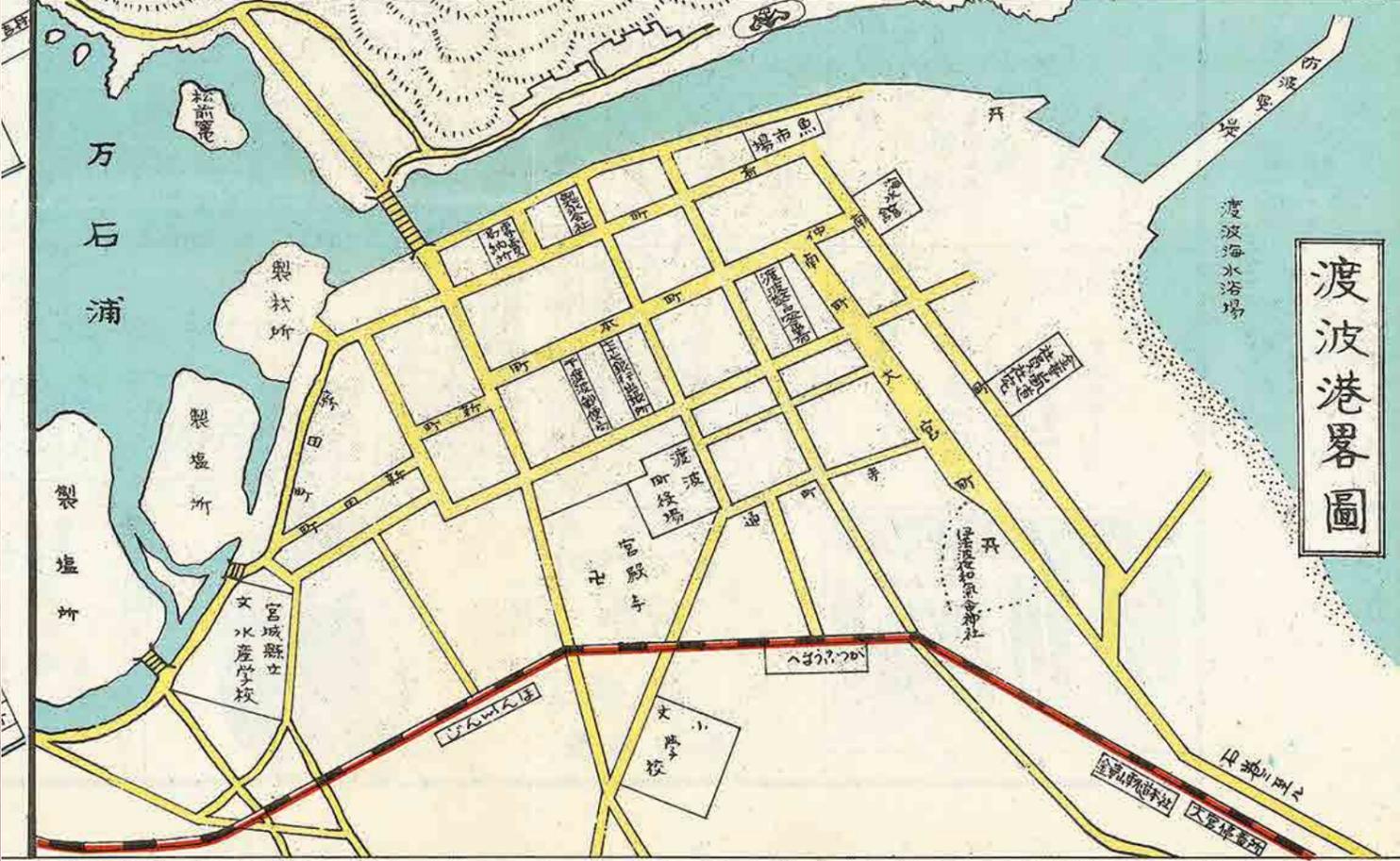
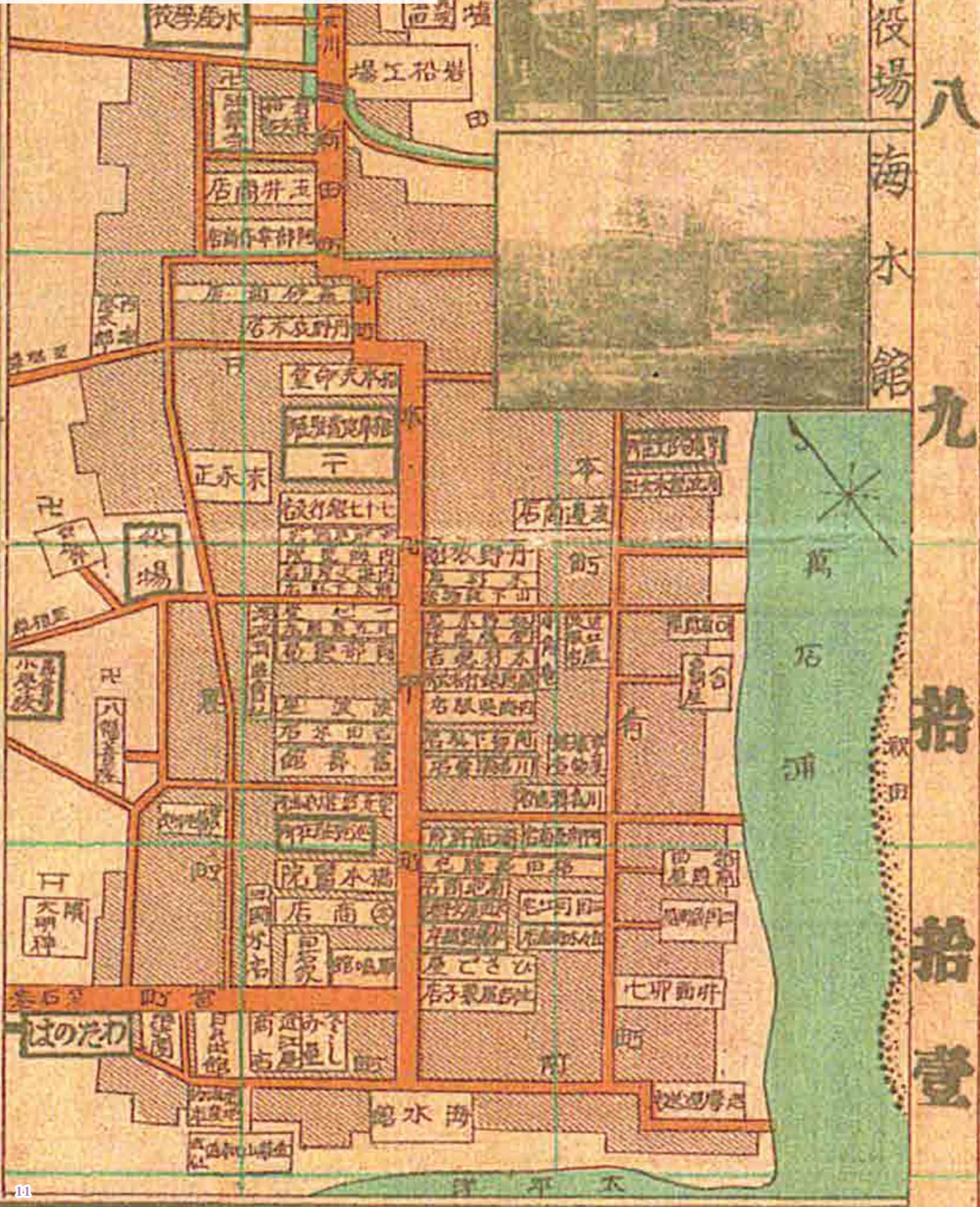
地図5 「石巻町渡波町地図」(明治25(1892)年・国土地理院所蔵)

1892(明治25)年、陸軍参謀本部の指示で第二師団(仙台)が測量作成。等高線が描かれて後の五万分の一地図の原型となる参謀本部図。範囲は陸前国牡鹿郡のうち渡波町(明治22年町制施行)と石巻町(同左)。左は北上川河口付近、右は万石浦と塩田。渡波市街地に相当する広大な塩田面積がよくわかる。

渡波町は旧根岸村、祝田浜、佐須浜で町制施行し「大堤」①「根岸官林」②の西側が石巻町境。久傳寺③は「宮殿寺」、須賀松山④は「鹿松山」の誤記。石巻町は大字鹿嶋(鹿妻)⑤、字茨地(伊原津)⑥から西部。本山寺⑦は「法山寺」、思厳寺⑧は「松厳寺」、字五外浦⑨は「御所浦」、雷神祠⑩は「稻荷明神」の誤記。石巻湾に面した石巻渡波間の直線道路(渡波道・金華山道)⑪が防潮林の間を走る。

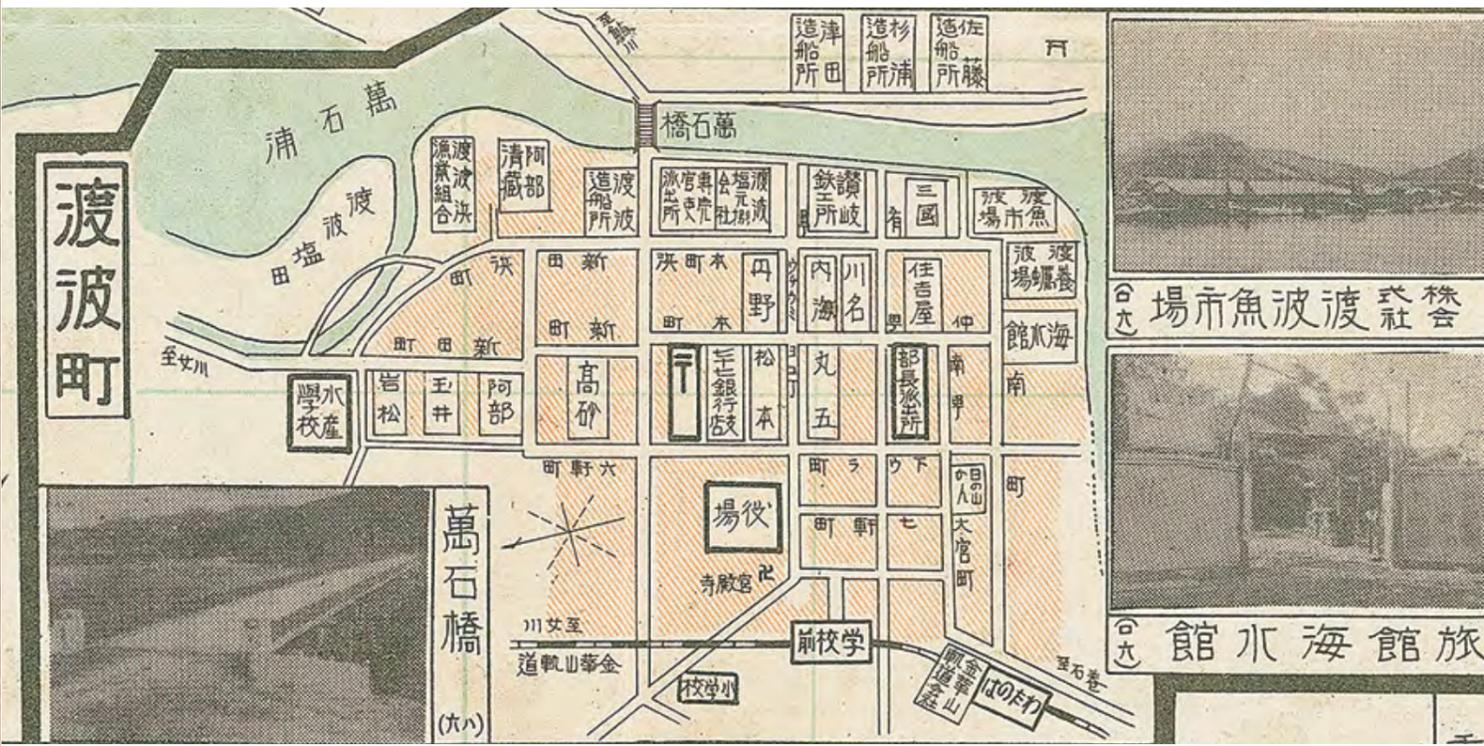
地図6 「大日本職業別明細図」

(大正14年・大森信治郎氏所蔵)  
 大正期の渡波町を描いた唯一の市街図。横書き文字は右から左の戦前のスタイル。東南方向に万石浦と太平洋、西北に市街地を描き、町役場、小学校、水産学校、郵便局、銀行、牡鹿軌道渡波駅、寺社のほか主要商店・旅館と基幹産業の渡波塩田などの所在が分かる。



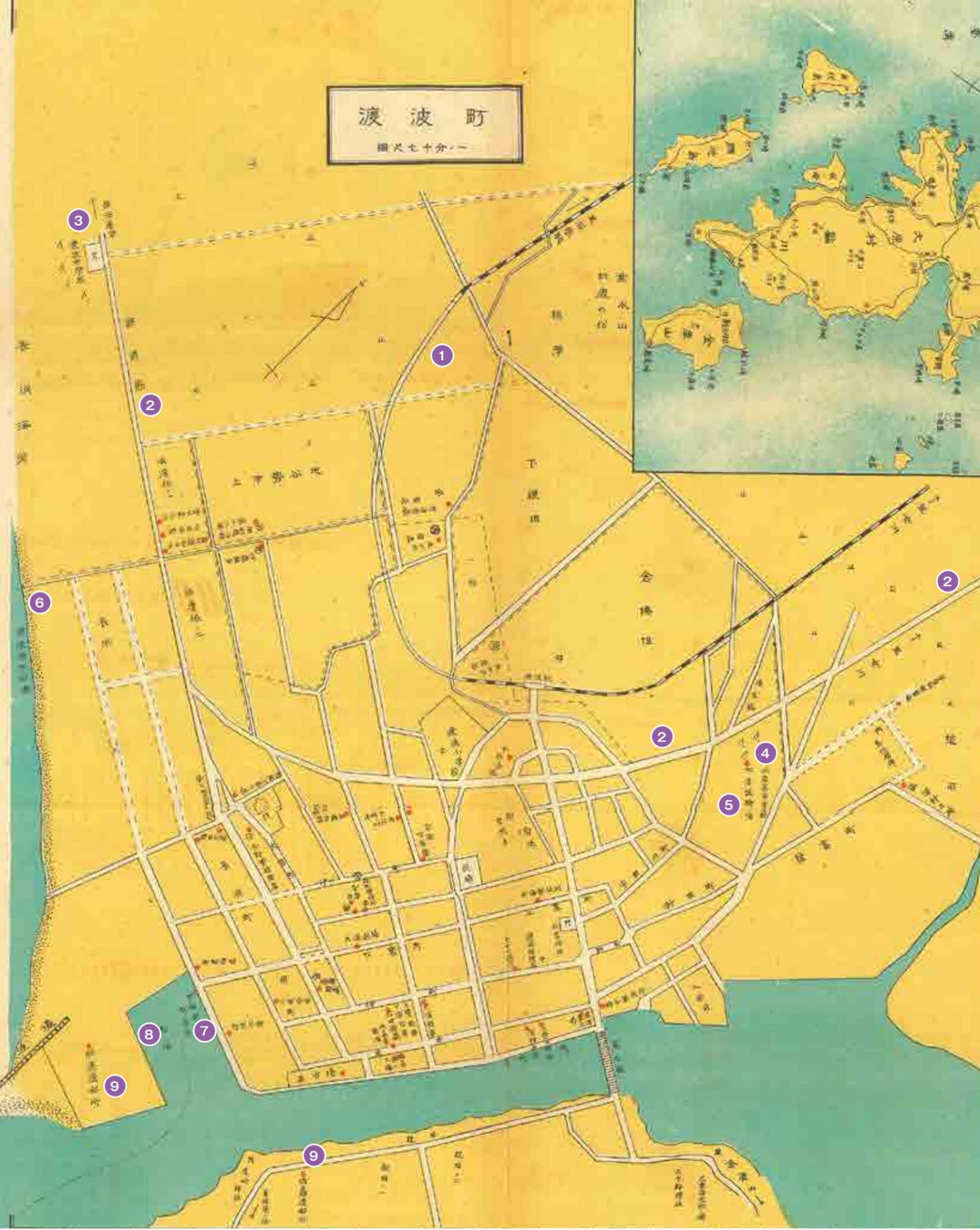
地図7 「石巻市街全図」(昭和8年・菊田貞吾氏所蔵)

明治22年の町制施行後の渡波町の地図は数少なく、大正期に入るも町並と道路などを記した一般的な地図は未作成なのか、発見されていない。よって本図が初見地図と考えられる。道路網と主要施設。石巻湊と女川間を結んだ金華山軌道(昭和14年・石巻線女川延伸で買収廃線)のルートを示す赤線。万石浦入口に渡波魚市場(昭和5年開設)、昭和7年架橋のコンクリート橋の万石橋が見える。祝田浜沖の万石浦に浮かぶ塩田「松前釜」が分かる。



地図8 「大日本職業別明細図」(昭和9年・菊田貞吾氏所蔵)

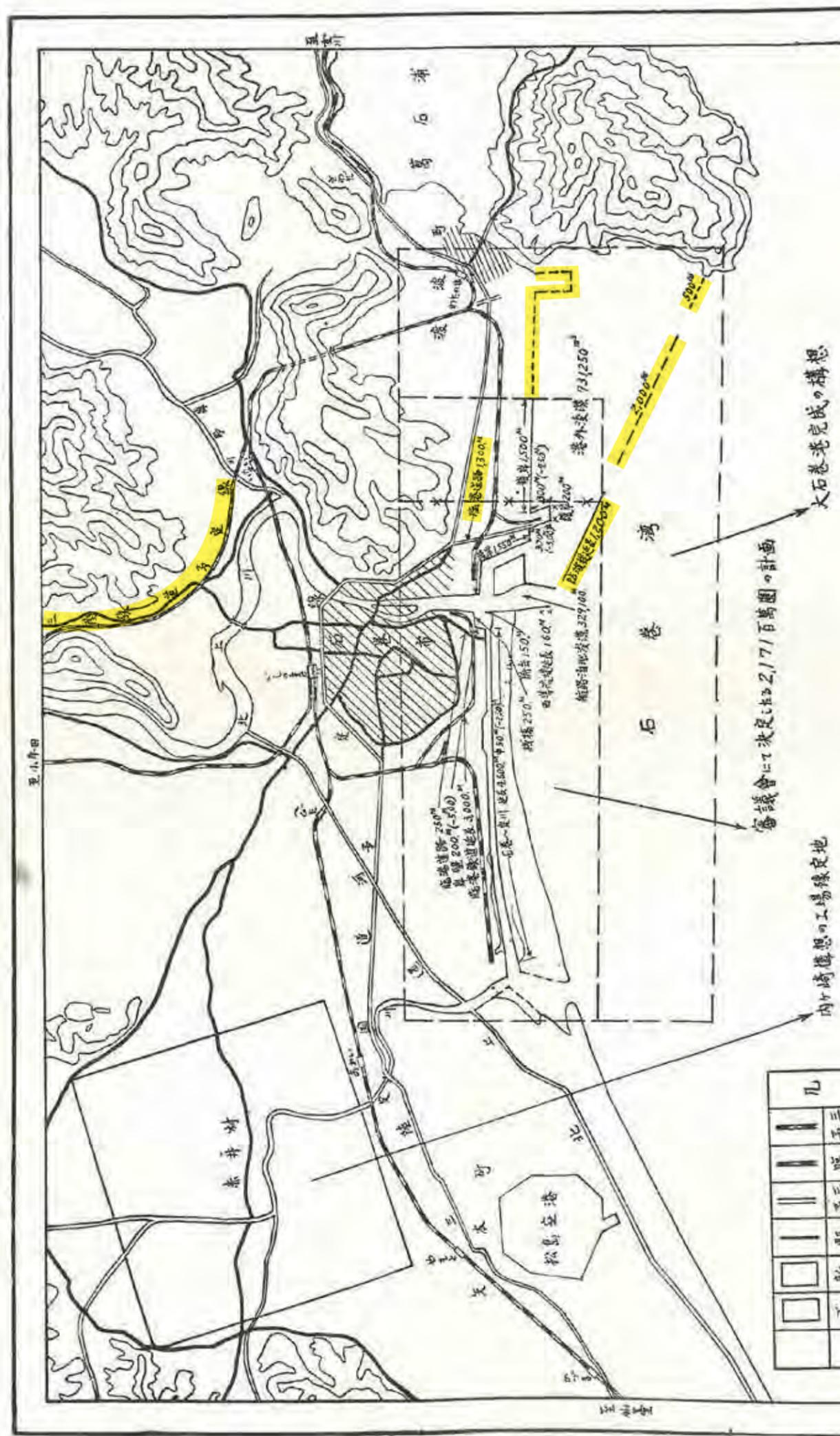
地図-7 から1年後の渡波町。町内道路網と公共施設の「専売官吏派出所」や「部長派出所」、宮殿寺、「渡波塩元捌会社」、「渡波養蠶場」、「金華山軌道会社」、「水産学校」などのほか鉄道線路と停車場。万石浦と渡波塩田地。「(株)渡波魚市場」、「万石橋」、「旅館海水館」の添付写真が珍しい。



地図9 「石巻渡波女川新総合地図」(昭和23年・鈴木紀男氏所蔵)

石巻線渡波駅と万石橋間の渡波町市街地の町名と道路網が明瞭。並びに渡波町内を走る石巻線が北側の稲井村から大和田トンネルを抜けて渡波駅に入線するため大きくU字蛇行する路線が分かる①。

石巻市から女川町に至る現在の「県道路」②が開通している。新制の「渡波中学校」③や「水産高等学校」④、水産校の側に「水産試験場」⑤、県内外に知られた「長浜海水浴場」⑥。「巡航船発着場」⑦と「船場(停泊地)」⑧、万石浦沿いに「牡鹿造船所・佐藤同」⑨などが見える。



地図10 「大石巻湊修築構想図」(昭和30(1955)年頃・石巻市史第二巻より引用)

石巻湾に面した北上川河口の石巻市は河口を中心に東西(万石浦入口から定川河口)の海岸線で新港整備を計画。後に構想は北上川河口の東西に「石巻新漁港」(昭和49年)、「石巻工業港」(42年)として実現。北上川東岸は石巻市長浜海岸に護岸(総延長1550メートル+1100メートル建設)、臨港道路(総延長1300メートル新設)、三陸鉄道予定線(渡波駅から水場岸壁に新設)、沖防波堤(1200メートル新設)。航路泊地浚渫と港外浚渫。渡波地区に護岸新設と沖防波堤(総延長2500メートル新設)。北上川西岸整備(石巻工業港)内容は省略。昭和28年に門脇魚市場に臨港線が開通したのを受けて、湊魚市場の臨港線は渡波駅を起点とする三陸鉄道予定線構想が立案された。



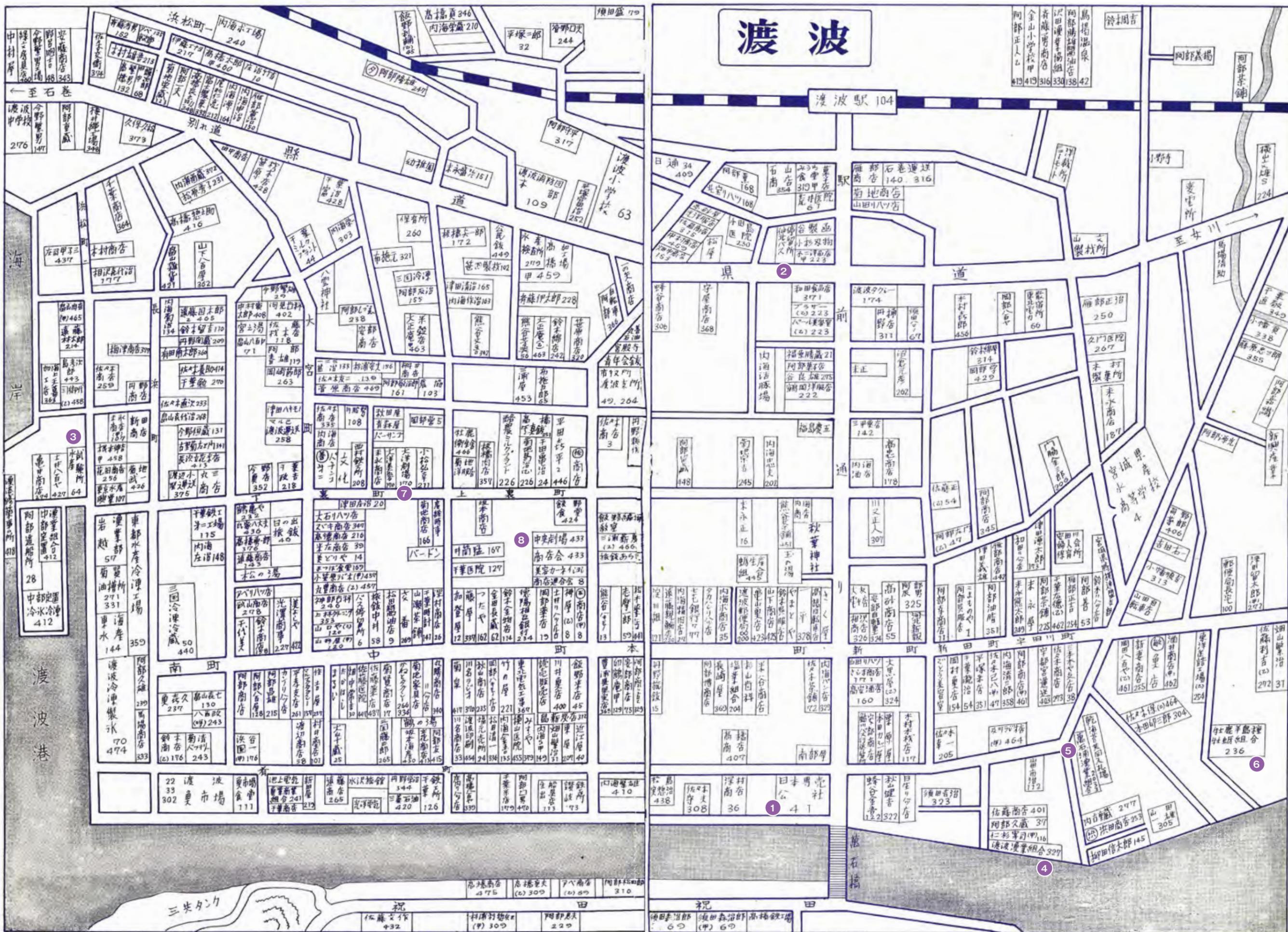
写真1 「渡波町航空写真」(昭和27(1952)年・「国土地理院ホームページ」より合成)

万石浦と塩田を中心とした航空写真。画面の北側は稲井町流留①・沢田②、南側は渡波町③。左下から右上に延びる道路④は石巻女川線(国道398号)、石巻線のU字型線路⑤と渡波駅⑥、駅舎から延びる万石橋への道路⑦。万石浦に面した塩田は水路・七句堀⑧を挟んで東側の大面積が流留塩田⑨、狭い方が渡波塩田⑩。昭和35年の廃止まで製塩が続けられる。



**写真2 「渡波町航空写真」(昭和27(1952)年・「国土地理院ホームページ」より合成)**

石巻市湊地区の大半と渡波町の一部の航空写真。画面右上は根岸の「大堤」①、筋状に浜堤列の集落、渡波長浜海岸の北側、道路下に渡波中学校の校庭②が見える。牧山と海岸の間の渡波道は海退後の浜堤(微高地)を利用した直線道路。湊地区に見られた「砂山」③は海浜のなごりとして堆積した砂山。



地図11 「石巻商案内図」(昭和34年・浅野太一郎氏所蔵)

昭和34年5月15日、石巻市と牡鹿郡渡波町(人口14,289人)が合併し、石巻市の人口は78,219人となる。図は合併を記念し、同日に刊行された初期の住宅地図のようなもの。有料掲載のため町内の有力な企業や商店に記載が限定され全てを記載し

ていない。地図中に「日本専売公社」①、「仙北バス停留所」②、「水産試験場」③、「渡波漁協」④、「万石浦漁協」⑤、「種牡蠣組合」⑥、「大洋劇場」⑦、「中央劇場」⑧など地域特有の主要施設が見られる。また、万石橋は翌35年5月、チリ地震津波によって通行止めとなる大損傷を受けた。同年、江戸時代から320年続いた万石浦の塩田も廃止となる。

地図12 「住宅表示新旧対照図」(昭和42年・石巻市発行)

石巻市は、1965(昭和40)年4月1日に市東部の石巻市湊地区、66年5月1日に石巻市石巻・門脇地区、67年4月1日に石巻市渡波地区と石巻市山下地区で新住居表示を施行。旧来の石巻市大字渡波字〇町〇番地などに替わって、石巻市渡波町〇丁目〇番〇号などと住居表示を変更し、市街地の町名と土地番号が分かりやすくなった一方、昔ながらのゆかりある地名の多くが消滅してしまった。

塩富町1丁目・2丁目は旧塩田跡地であり、製塩場を示す「旧明神釜」、「旧石田釜」、「旧岸釜」、「旧三勺」などの字名が消えた。

江戸～明治22年

渡波 本町  
裏町  
南町  
新田町  
新町の町場があった。

人口 2369人(『安永風土記』)

(村社) 浜大明神社など

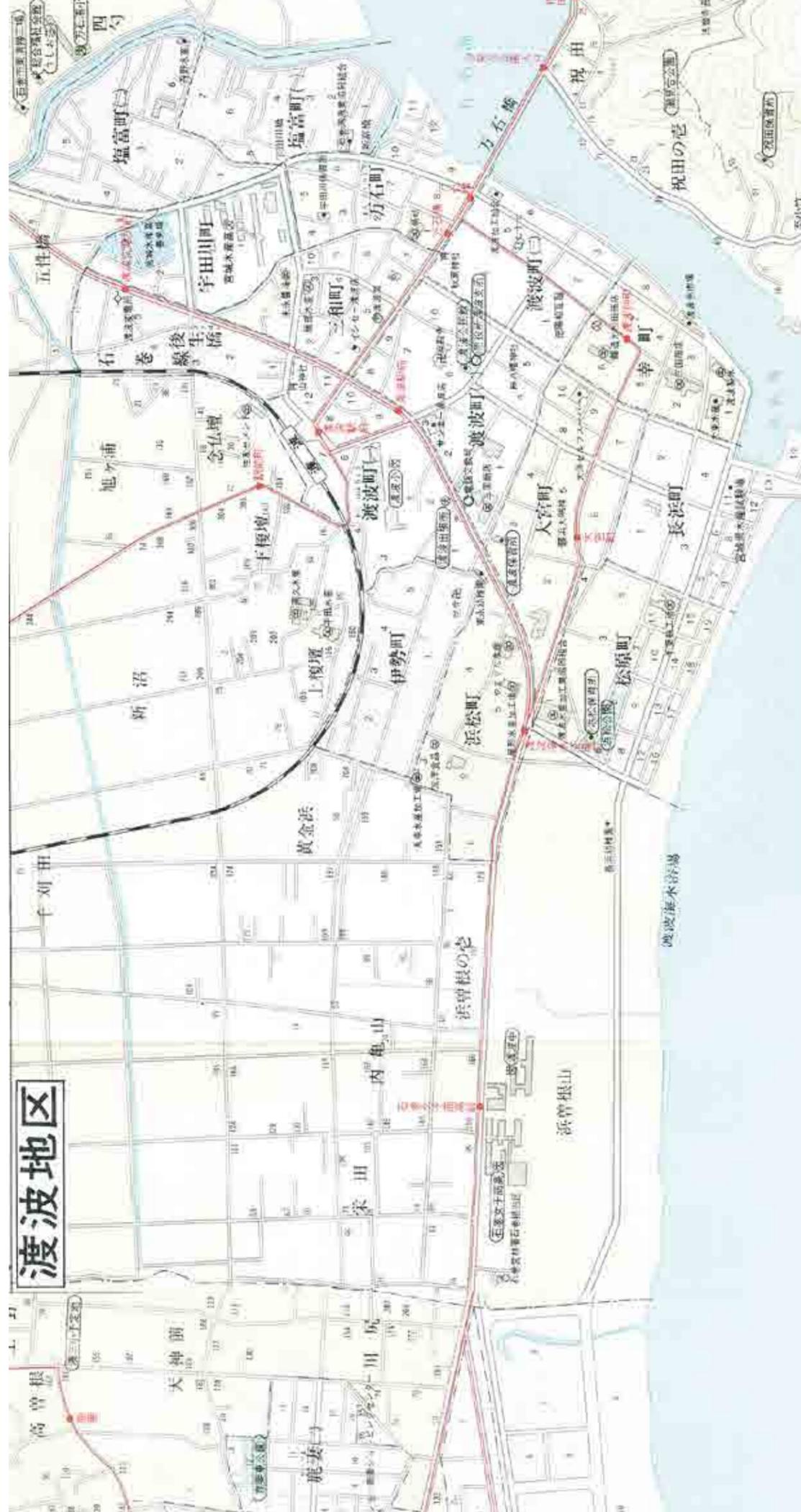
(村寺) 曹洞宗法巡山宮殿寺・本山派常楽院

昭和41年～

渡波 伊勢町  
浜松町  
松原町  
大宮町  
長浜町  
幸町  
渡波町1～3丁目  
三和町  
後生橋  
宇田川町  
塩富町1～2丁目  
万石町  
塩富町1～2丁目  
(垂水町1～3丁目)  
渡波

※住居表示変更前は、下伊勢谷地、駅前、念仏壇・裏町・中町・肴町などの地名があった。





地図13 「いしのみまき案内地図」(昭和55年(1980)・石巻市発行)

石巻線渡波駅を中心とした渡波市街図。左端が石巻市境、宇栄田は境田の転訛。右端の「塩富町」、「宇田川町」、「後生橋」の北側の四ッや五性橋は旧稲井町流留の地。

地図14 「いしのみまき案内地図」(平成31(2019)年・石巻市発行)

平成23年の東北地方太平洋沖地震の前に開町した「新成1~3丁目」、後に開町した「新成1~5丁目」を含む最新の渡波町全図。「新成1~3丁目」は平成23年2月5日、石巻線渡波駅の北側の渡波字旭ヶ浦、流留字垂水地内などに開町。平成30年9月現在、339世帯、人口は1011人。「さくら町」は東北地方太平洋沖地震後の平成30年9月30日、新成の西側に隣接した渡波字新沼などに開町。450世帯、人口は997人。

地図15 「いしのみまき案内地図」(昭和55年(1980)・石巻市発行)

石巻線渡波駅を中心とした渡波市街図。左端が石巻市境、宇栄田は境田の転訛。右端の「塩富町」、「宇田川町」、「後生橋」の北側の四ッや五性橋は旧稲井町流留の地。

地図16 「いしのみまき案内地図」(平成31(2019)年・石巻市発行)

平成23年の東北地方太平洋沖地震の前に開町した「新成1~3丁目」、後に開町した「新成1~5丁目」を含む最新の渡波町全図。「新成1~3丁目」は平成23年2月5日、石巻線渡波駅の北側の渡波字旭ヶ浦、流留字垂水地内などに開町。平成30年9月現在、339世帯、人口は1011人。「さくら町」は東北地方太平洋沖地震後の平成30年9月30日、新成の西側に隣接した渡波字新沼などに開町。450世帯、人口は997人。

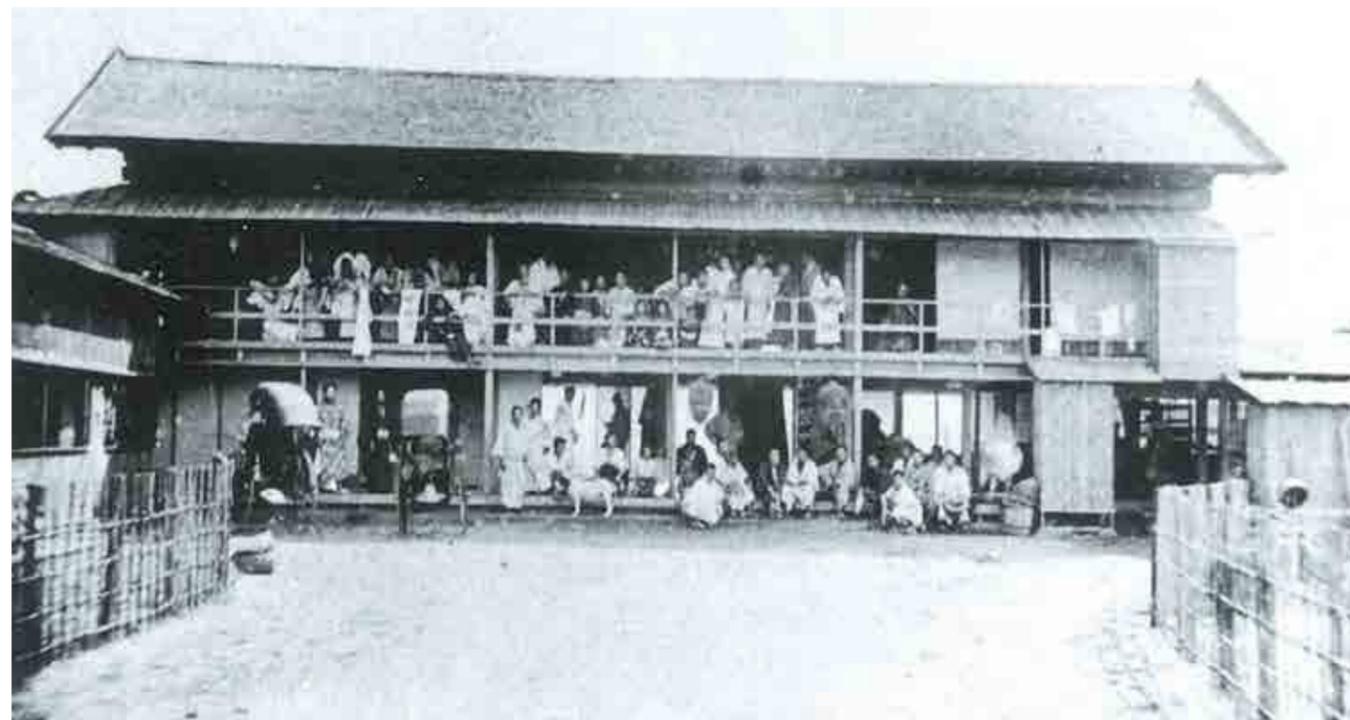
写真3 渡波おもいでアルバム1



▲渡波通り(「石巻・東松島・女川今昔写真帖」より・昭和34年)  
本町と並ぶ本町南側の商店街。徳陽相互銀行、川名ラジオ、鈴木金物店、加登屋食堂、松田醤油店など各種専門店が軒を連ねた。



▲渡波小学校(「石巻・東松島・女川今昔写真帖」より・明治40年代)  
渡波小学校は明治6年4月、宮殿寺を仮校舎として開校。明治16年10月、現支所に新校舎2棟を新築移転。明治43年5月、現在地に新校舎を新築移転。敷地内の樹々の背丈が低いことから落成まもない時代と推察する。



▲渡波海水浴場に開設された海の家「海水館」(「石巻・桃生・牡鹿の100年」より・大正中期)  
明治期の流行に海水浴がある。病気療養や健康増進が目的。古くから海水にひたる塩湯治の風習は明治期に欧米から海水浴として効能が伝わり流行。春潮楼の支店として旅館兼料理店「海水館」が開業。また、石巻町の私立牡鹿病院は渡波海岸に病気療養施設の「海浜院」を開設した。



▲渡波消防本部(「石巻・桃生・牡鹿の100年」より・昭和30年代)  
写真は、石巻市との合併前が民家風の木造建物内の消防ポンプ車で消防関連施設と分かる。



▲伊原津温泉(「写真集 明治大正昭和 石巻」より・明治38年)  
明治期に流行したのが海水浴と温泉。石巻地方に天然温泉はなく水温の低い冷泉水を加熱して温泉化。石巻町湊田町の箱崎温泉、湊伊原津の伊原津温泉などが知られる。



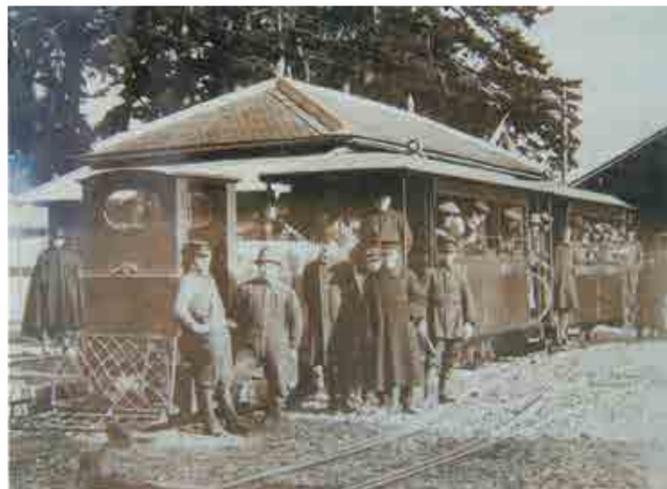
▲渡波小秋季大運動会(「グラビア石巻第3集」より・大正10年)  
石巻地方の運動会は明治22年5月、石巻町の石巻尋常小学校が湊・門脇・釜・鹿妻文教場生徒全員が合同で雲雀野海岸を会場に開催したのがはじまり。



▲種牡蠣の輸出(「石巻・桃生・牡鹿の100年」より・昭和25年)  
種牡蠣のアメリカ輸出。戦後、石巻地方から初の海外輸出が渡波町産の種牡蠣。木箱のケースに刷り版で「SEED OYSTER」の文字。牡蠣は小船で岸壁に水揚げし箱詰め。箱詰した蓋は板のくぎ打ち止めか。



▲牡鹿軌道(株)開業10周年記念運行(故 柴山繁氏蔵・柴山耕一氏管理)  
馬が軌道上の客車を牽引する牡鹿軌道(柴山英三社長)は1915(大正4)年8月3日、北上川東岸の石巻町湊と渡波町大宮町間に開業。3年前の大正元年、仙北軽便鉄道が小牛田～石巻間に開業し、同軌道は仙北軽便に接続する北上川東岸地域の新交通で牡鹿軌道湊駅と軽便鉄道石巻駅は連絡馬車(料金5銭)が東西内海橋を経由して北上川の兩岸を結んだ。長浜海岸の松原内を運行中の写真は開業10周年の1925年の撮影で馬が引く客車に記念文字が読める。



▲金華山軌道(故 柴山繁氏蔵・柴山耕一氏管理)  
牡鹿軌道はレール幅762ミリの狭軌鉄道。始発の石巻湊と渡波町大宮町間は所要時間約20分、料金は10銭。牡鹿軌道は1924年5月、金華山軌道に吸収合併。新会社は25年11月10日、ガソリン機関車(4両)を導入。26年3月から路線を石巻湊・渡波間から女川町間まで13.8kmに延長して営業。金華山軌道の短所は低速、普及した高速のバスに乗客をとって替われ、やがて1939年の石巻線の女川駅延伸開業で買収されて廃線となった。



▲渡波町仲町通り(「宮城三陸・登米の昭和」より・昭和初期)  
渡波町仲町とあるが、正しくは字中町で字本町(1642年開町の渡波最古)の南側。電信柱と未舗装道路、昭和初期では普通の風景。



▲長浜砂丘(「石巻・桃生・牡鹿の100年」より・昭和24年頃)  
長浜砂丘とは迷解説である。風が造る砂丘の風紋は芸術的、この風は海風が冬場の季節風か。これほどの風景がどこにあったか場所が分からない。

写真4 渡波おもいでアルバム2



▲祝田浜の山から眼下は万石浦と渡波町と万石橋の珍しいアングル  
(「石巻・桃生・牡鹿の100年」より・昭和25年頃)



▲渡波中町通り、右側から雑貨たばこ店、千葉時計店、山瀬茶舗、深村八百屋など  
(「石巻・桃生・牡鹿の100年」より・昭和30年代)



▲渡波から沢田に至る取揚坂には昭和初期に高名な鳥揚温泉石川旅館が開業した(亀山幸一著「グラビア石巻」より)



▲年末恒例の渡波蔵の市  
(亀山幸一著「グラビア石巻」より)



▲宮城水産高校(明治末期・鈴木紀男氏蔵)



▲宮城県内外に知られた渡波町営海水浴場  
(年代不明・鈴木紀男氏蔵)



▲渡波小学校の新講堂完成記念(亀山幸一著「グラビア石巻 第3集」より)



▲水路は渡波塩田か流留塩田のいずれか、塩田を象徴するのが釜屋の煙突  
(亀山幸一著「グラビア石巻」より)



▲渡波町幸町通りは旧中町時代からの繁華街(亀山幸一著「グラビア石巻」より)



▲渡波町幸町通りは旧中町時代からの繁華街(亀山幸一著「グラビア石巻」より)



▲渡波駅を背にした駅前・万石橋通り(亀山幸一著「グラビア石巻」より)



▲病氣療養を兼ねた明治から大正時代に一世を風靡した海水館(佐久間善四郎経営)。  
(年代不明・鈴木紀男氏蔵)



▲宅地化が進む渡波五性橋と隣接する流留二番団。道路は後の国道398号(亀山幸一著「グラビア石巻」より)

写真5 渡波おもいでアルバム3



▲宮城水産高校・宮城県水産試験場(明治41年撮影「石巻・東松島・女川今昔帖」より)  
宮城水産高校は明治30(1897)年、牡鹿郡立簡易水産学校として内海橋湊側の石巻町湊田町で創立。渡波町の誘致活動により同39年に現在地に転移し、郡立牡鹿水産学校として開校。同41(1908)年に県内唯一の県立宮城水産学校に昇格、同月に宮城県水産試験場を併設。漁業、製造、養殖分野で本県の水産業振興に関わる人材を育成。昭和23(1948)年、新制高校の宮城県水産高等学校となり、昭和52(1977)年には、女子に門戸を開放。水産試験場はその後、昭和27(1953)年に渡波町長浜に独立移転。現在は宮城県水産技術総合センター(渡波町袖の浜)となった。



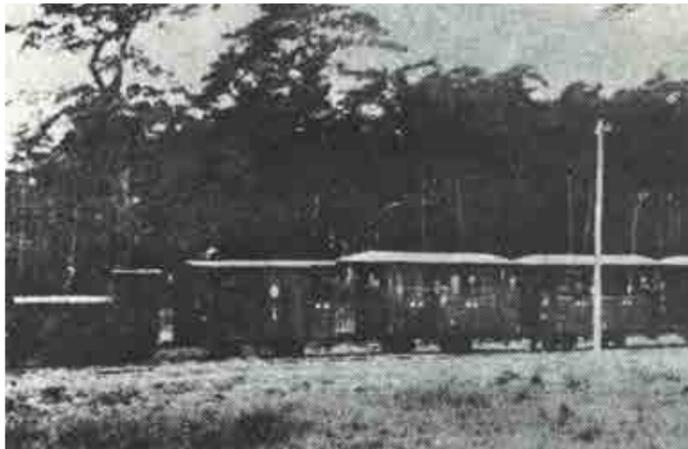
▲渡波塩田(昭和10年代撮影「石巻・東松島・女川今昔帖」より)  
渡波塩田は寛永2(1625)年、流留村の菊池与惣右衛門が行徳(千葉県)で入浜式塩田を見学、後に職人を招き45町歩の塩田を開いたことに始まる。その後、製塩は仙台藩の直営事業となり、文化4(1807)年、流留と渡波塩田の生産量は約9万俵と仙台藩全体の半分を占め藩の財政に貢献した。明治以降も製塩は続けられたが、渡波塩業組合は廃止を決め、昭和35(1960)年に320年の幕を閉じた。



▲万石浦(明治末期「写真集 明治大正昭和 石巻」より)  
名前は仙台藩の第二代藩主伊達忠宗が「ここを干拓すれば一萬石の米が取れるだろう」と言ったことに由来するとされる。江戸時代には塩田があり、1960年頃まで製塩が行われていた。万石浦は古くは水上交通路でもあり、大正時代には浦宿と渡波を結ぶ定期航路があった。これは、浦宿に住む個人が2隻の発動機船で始めたもので、渡波で馬車鉄道の牡鹿軌道と乗り継ぐことで、石巻方面との交通路になっていた。しかし、牡鹿軌道を引き継いだ金華山軌道が女川まで延伸すると、この定期航路はなくなった。



▲仇討ちの舞台・祝田浜(昭和34年代撮影「石巻・東松島・女川今昔帖」より)  
石巻を起点とする金華山参詣の道が金華山道であり、大金寺は明治期に黄金山神社と改称された。石巻から渡波を経て、万石浦を小舟で渡り風越峠を経て鮎川に至る牡鹿半島縦断の12里(48キロ)の道は難所でもあった。幕末の安政4(1857)年、越後国新発田藩士・久米幸太郎が父の仇、滝沢休右衛門を仇討ちで果たしたのがこの祝田浜梨木畑と言われている。



▲牡鹿軌道・金華山軌道(大正10年頃「写真集 明治大正昭和 石巻」より)  
大正4(1915)年、牡鹿軌道が石巻湊～渡波間を馬車鉄道として開業。その後、大正13(1924)年に金華山軌道との合併し、牡鹿軌道は解散となった。牡鹿軌道社長の柴山英三がそのまま金華山軌道の社長に就任し、大正15(1926)年に渡波～女川間開通し、石巻湊～女川間全通させ動力も馬力から内燃式に変更し輸送力を向上。しかし、昭和14(1939)年、石巻線の女川延伸により、客足が激減し同年に運転休止。同線が原因のため国の補償が受けられることになり、バスによる乗合自動車業に転じ、金華山自動車に社名変更。昭和20(1945)年、仙北鉄道(株)に買収された。



▲市立女子商業高(昭和56年「グラビア石巻」より)  
昭和32(1957)年開校、女子の高等教育、商業に関する専門教育を施すことを目的とした渡波町立渡波家政専修学校が前身。石巻市との合併後の同37(1962)年、市立女子商業高等学校と名称変更。結果的には、大正14(1925)年開校の石巻実業学校が、市立女子高となり、市立の女子高が2校存在した。同高の震災前校舎は平成元年落成だが、それ以前の木造校舎時代にも存在した二本松は、市女商高の象徴的なものとして残されていた。震災後の平成27年、市立女子高2校は、新たに石巻市立桜坂高校として開校した。



▲渡波海水浴場(大正末期・鈴木紀男氏蔵)  
大正5年の渡波町々々海水浴場の広告には「牡鹿半島、金華山沖にて漁獲せる漁族の集散地なるを以て、海水浴の季節には新鮮なる魚類豊富に、其の価亦極めて廉にして、鯉魚一尾の価僅かに十五銭内外なるを常とす。附近は散策地に乏しからざるのみならず、投げ網、打瀬船、釣魚、蛤採集、短艇、舟遊等の遊樂機あり」とある。遠浅で穏やかな渡波海水浴場は、昔から県内外からの海水浴客で賑わった。



▲万石橋(昭和10年代撮影「石巻・東松島・女川今昔帖」より)  
初代万石橋は、それまで渡船に変わり昭和7(1932)年に渡波と祝田浜を結ぶ鉄筋コンクリート橋として完成。写真の右下のT字にみえる道路は、祝田浜・佐須を経由し金華山道につながる新道。2代目の橋は、平成4(1992)年、60年ぶりに架け替えられた。万石橋の形式は、ランガー合成I型、全長178メートル、幅員10メートルで、今でも牡鹿半島への重要な橋であることは変わらない。



▲渡波町全景(大正10年頃「写真集 明治大正昭和 石巻」より)  
天文年中(1532～54)に熊本の本佐木肥後によって開発され、江戸時代、寛永3(1626)年から始まった塩田開発と、金華山への旅行者などで賑わう街となり、渡波本町には寛永18(1641)に開宿、根岸村の発展とともに渡波の中心地となった。明治22年、根岸村と祝田浜・佐須浜が合併し、渡波町が誕生。明治以降、渡波港は石巻港と地理的に離れていたために独自の発展を遂げ、明治中期には県下随一の漁港としても名を馳せた。



▲渡波専売官吏派出所(平成20年撮影「石巻・東松島・女川今昔帖」より)  
旧大蔵省は明治38年6月、塩専売法の施行に伴い、翌年から塩の収納管理施設として全国51カ所に派出所を設置した。万石橋近くの旧派出所跡の建物は建築年不明だが、木造平屋寄棟造り、外壁は横板張りの洋風建築。建物は各地に現存する同施設と外観上の共通性が見られ、大蔵省の設計施工指導による同一設計図を基にした建築と思われる。



▲ベイパーク石巻(平成14年「グラビア石巻 第3集」より)  
平成5(1993)年にオープンした万石ベイパーク経営の本格的遊園地。ジェットコースターやゴーカート、観覧車、レストラン等の施設があり、いちご狩りや潮干狩りも出来た。初年度は年間13万人の客で賑わっていたが、その後は不況と重なり年々入場者が減少。平成14(2002)年5月30日の営業をもって閉園した。現在は、イオン石巻東ショッピングセンターになっている。

# 渡波町振興記念日制定趣意書

諸君、我等青壯年團員並びに我々同志同行の町民各位が茲に春宵一刻價千金の夜、ラッパと歌と、足音と、さらにそれらを統制し目的を表はす大旗をふりかざして行進する目的はそも／＼何邊にあるのでせうか。

諸君、昨年の本月本日町長さんの申された記念日、忘るゝ事の出来ない日。即ち渡波町振興記念日は本日であります。昨年の本日攻守攻防よく大道に立つて奮戦又奮戦されたけれども後援頼み、涙を飲み、腸をちぎられるような無電局移管決定の當日であります。

この日町長さんの申された「貧しさの憐れ」をしみじみ感ずるご共にこの「貧しさもの、行方を」我等青壯年團員が愛郷の第一線に立つて、この「貧しさ」を克服し、更に躍進の大道に進まんご、三百の若人は町振興の大旗を頭上高くかゝげんご決心し、以來臥薪一ヶ年、或は座談會の開催、或は演祭りを行ひ又は遠く仙臺に郷土特産品紹介のため出張販賣する等の事業を行つて、ぬぐひごもぬぐひ盡せない今日を迎いたのであります。

吾等は本日の記念日を迎ひ、新なる感激に充されるのであります。それは吾等の綱領である町振興のために生き、町發展に盡し、町繁榮の聲と共に終らうとする決心を益々堅くするは勿論、今や全町あげて振興の氣はあがり、歩一歩力強い行進を見る事が出来るからであります。

吾等をめぐる八千の皆さん、傳統三百年、生れ、育ち、成人し、さうして、忘れかけられた町の華、町民の生命、鐵火魂を復興し、この精神にて振興に當り、分れては、吾人の日々業務に反映させ、結んでは、全町一丸となつて、この振興の大旗に集つて、將來に向つて、振興の行進を行ふべき事と思ふ者であります。

諸君、吾等の、この趣意に、御賛成の方は、何卒高く提灯をあげて下さい、もう一回、その提灯をあげて、振興の歌と共に、振興行進を開始して下さい。

記念日 四月二十三日

渡波町壯年團  
渡波町青年團

## 「渡波町振興記念日制定趣意書」(昭和9(1934)年4月23日か・鈴木紀男氏蔵)

渡波町から石巻市に移転決定した(漁業)無電局に奮起し、屈辱の日を町の振興記念日とする決意を内容とした趣意書。渡波町の宮城県漁業無線電信所は昭和8年4月(または12年3月)、石巻市門脇字善海田に移転(開局)する。宮城県の電信所新規開設計画が進行する中、石巻市が水面下で進めた誘致運動による決定は、渡波町民に屈辱的な移転劇として町民の奮起を招いた。時の渡波町長は名町長の誉れの高い菊地明夫氏です。

2019年10月からスタートした『おらほの町の郷土史づくりプロジェクト』は、門脇・湊・蛇田・渡波の4会場で各3回ずつ開催されました。この間、多くの方々から、『懐かしいね〜』、『あ〜、あった、あった』などの声が出て、その時代の記憶を呼び起こし、それらを記録に残す作業にご協力いただきました。時には、自宅にある資料を提供いただいたり、震災でふるさとを離れる友人に教えたいから、資料くださいとお話しがあったり、予想外の事もありました。

今回、3回のワークショップをベースにまとめた資料と住民の方々からいただいた情報を1冊にまとめ、地域郷土史のひとつとして残したいと思います。東日本大震災と津波の影響で大きな変化を強いられた、この地区の郷土づくりに少しでもお役に立てて、今後の地域活性化を心より祈念しております。

特定非営利活動法人 石巻アーカイブ  
代表理事 小野寺 豊

### (参考文献)

- 『石巻の歴史』(石巻市)
- 『宮城県地名考』(宝文堂刊・菊池勝之助著・昭和45年)
- 『十條製紙石巻工場50年史』(同編集委員会編・平成2年)
- 『グラビア石巻』(亀山幸一著・昭和56年刊)
- 『続 グラビア石巻』(亀山幸一著・昭和59年刊)
- 『グラビア石巻 第3集』(亀山幸一著・平成15年刊)
- 『写真集 明治大正昭和 石巻』(国書刊行会・昭和55年刊)
- 『紅海心—稲井三治翁の八十八年—』(亀山幸一著・昭和63年刊)
- 『石巻・東松島・女川今昔帖』(郷土出版社刊・平成21年刊)
- 『宮城三陸・登米の昭和』(いき出版社刊・平成2年刊)
- 『石巻・桃生・牡鹿の100年』(郷土出版社刊・平成12年刊)
- 『石巻今はなくなった風景2』(小松健一著・昭和56年刊)
- 『石巻今はなくなった風景』(小松健一著・昭和57年刊)
- 『石巻今はなくなった風景』(小松健一著・昭和57年刊)
- 『鉄道ビクトリアル』((株)電気車研究会刊 2015年8月号  
「古い写真に見る牡鹿軌道・金華山軌道」より)

### (資料提供・協力)

- ・阿部 和夫 氏
- ・木村 敏郎 氏
- ・亀山 幸一 氏
- ・鈴木 紀男 氏
- ・本間 英一 氏
- ・大森 信治郎 氏
- ・浅野 太一 氏
- ・邊見 清二 氏
- ・菊田 貞吾 氏
- ・高橋 佑弥 氏
- ・故 柴山 繁 氏
- ・柴山 耕一 氏
- ・国土地理院
- ・(株)七星社
- ・石巻市
- ・(株)昭文社

## 写真と地図で見る歴史 『渡波事典』

【非売品】

(おらほの町の郷土史づくりプロジェクト報告書)

【編集】特定非営利活動法人 石巻アーカイブ

【執筆】邊見清二・小野寺豊

【発行】令和2年3月

※本報告書は、令和元年度石巻市心の復興事業補助金で制作しました。